

④ 令和六年度 久留米大学附設中学校入学試験問題

国語科

注意 1 解答はすべて解答用紙に記入せよ。解答用紙だけを提出すること。

2 ㉠～㉣の各問いで、字数を指定している場合は、句読点などを含んだ字数である。

㉠ 設問と解答欄とは、解答用紙(全2の1)にある。

問四 ある漢字辞典で「辞」の項目を調べた。

㉡ 次の各問いに答えよ。

(1) 「辞」の項目を見ると、見出し字として示された「辞」の下に、「辛」「6」という二字が横並びで表示されていた。この「辛」「6」が表すのはどういう意味か、説明せよ。

問一 例にならって、次の①～③の意味になる「不可●」という三字熟語をそれぞれ完成させよ。

【辞】6 辛

(2) 「辞」の表す意味として、次のア～エが記載されていた。

- ア ことば。 イ 拒絶する。
- ウ 官職を退く。 エ 別れを告げる。

次の①～③の熟語で使われている「辞」の意味は、記載されていたア～エのどれにあたるか、それぞれ記号で答えよ。

- ① 病の床で辞世の句を詠んだ。
- ② 朝礼で社長が訓辞を述べた。
- ③ 役員就任の推挙を固辞した。

問二 次の①～③の傍線部について、言葉の性質が一つだけ他と異なっているものをア～オから選び、それぞれ記号で答えよ。

問五 次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字に直せ。

- (例) 理解できない。「不可●な人事異動」↓答【解】
- ① 無くてはならない。「不可●な存在」
- ② もとに戻らない。「不可●的な変化」
- ③ 目に見えない。「不可●の社会問題」

- ① ア とんでもない失敗を**して**しまった。
イ なりやまない拍手がうれしかった。
ウ もつた**いな**いから処分しなかった。
エ みつともない姿を見せたくはない。
- オ おとなげない態度を反省している。
- ② ア 彼女が披露した演技は**実**に見事だ。
イ 生徒が下校して校舎の中が静かだ。
ウ 前回の大会で優勝したのが**自慢**だ。
エ このプリンは舌触りがなめらかだ。
オ 温かい家族に**囲**まれて僕は幸せだ。
- ③ ア 父に**負**われて病院へ行った。
イ 妹に頼られてうれしかった。
ウ 娘に泣かれてとても困った。
エ 母に叱られて悲しくなった。
オ 兄に呼ばれて立ち止まった。

問三 次の①～③の二つの()に共通して入る、「たつぷり」「しつかり」のようにひらがな四字で「●●り」となる言葉を答えよ。

- ① あの人は()した性格の人だ。
難しくて()分からなかった。
- ② 彼の荷物は()残されていた。
姉妹だけに()な二人だった。
- ③ 先生から()と油を絞られた。
味つけが()した料理だった。

冬の日曜日。トットは、小さいころから通っている洗足(せんぞく)教会の日曜学校に出かけた。しとしと雨が降っていて、とても寒い朝だった。いつものように「寒いし、眠いし、おなががすいた」とつぶやきながら歩いていたら、この言葉を口ずさみさえすれば、遠足かなにかをしている気分になれた。

風がビュービューと音を立てている。涙が少し出ていたかもしれない。トットは、とても変な顔をしていたんだと思う。「おい、こちら」
突然、おまわりさんに呼び止められた。「おまえ、なんで泣いてるんだ?」
トットは手で涙をぬぐいながら、「寒いからです」

と答えた。するとおまわりさんは叫んだ。

「戦地の兵隊さんのことを考えてみる！ 寒いぐらいで泣いていてどうする。そんなことで泣くな！」

あまりの怒りようにトットはびつくりしたけど、「そうか、戦争のときは泣いてもいけないんだ」と思った。

「叱られるのは、やだ。泣くことも許されないので戦争なんだ。寒くて、眠くて、おなかがすいても、泣かないでいましょう。だって、兵隊さんはもつともつとつらいんだから」

それが、トットにできる精いっぱいのことだった。

町のあちこちで長い行列を見かけるようになった。品物が店に入荷したとわかると、あつという間に行列ができる。なにを売っているのかはAの次で、とにかく並んでおかなくてはと考えて、みんな行列をつくるのだった。

「ようやく自分の番が来たと思つて喜んだら、お葬式の焼香の列だったの」

いつだったか、ママがそんな落語みたいな話を聞かせてくれた。それを聞いたトットも「アハハハ」と声を出して笑つた。そのころは、まだお店にも少しは売れるものがあつて、ママたちにも、^②失敗を笑い話に変えられる余裕があつたのかもしれない。

そんなころの、自由ヶ丘駅前での出来事だ。

トモエ学園からの帰り道、電車に乗ろうとして駅前まで歩いてきたら、戦地に赴く兵隊さんが家族や町内の人たちに見送られて、出征の挨拶をしていた。

「そうか、あの人は戦争に行くんだ」

このときはまだ、トットのパパも身近な人も兵隊に取られてはいなかった。だから、そこにいる人たちの気持ちを想像するのはむずかしかつたけど、みんな自分の気持ちを押して殺しているような気がした。

「この旗を振ってね」

はじめての光景を眺めていたトットの目の前に、日の丸の小旗と、こんがり焼けたスルメの足が一本差し出された。見上げると、知らない男の人がトットに向かって微笑んでいる。

「なんだろう？ 旗を振れば、スルメをもらえるのかな」

もちろんこのときも、おなかがペコペコだったから、トットは思わずスルメと日の丸を手を取つた。

ママからはずっと「知らない人から、ものをもらつてはいけません」と教わっていたけど、おなかがすきすぎて、スルメの誘惑には勝てなかった。まわりを見ると、大人も子どもも兵隊さんに向かって「バンザイ！」と叫びながら、旗を振っている。

「やっぱり。スルメは旗を振るともらえるお駄賃なんだ」

トットはそう思つて、まわりの人といっしょに「バンザイ！」を叫び、一生懸命に小旗を振つた。

やがて、見送りの儀式がひと通り終わり、兵隊さんは駅の中に消えていった。^③旗を振っていた人たちも、みんな駅前から去っていった。

まわりに人がいなくなったのを見計らつて、トットはスルメの足を口につっこんだ。

この出来事があつてから、トットは兵隊さんの出征式を心待ち

にするようになった。トモエ学園は自由ヶ丘駅から目とBの先にある。授業中でも、駅のほうから兵隊さんを見送る「バンザイ！」が聞こえてくると、^④トットはそつと教室を抜け出して、駅をめぐって走り出した。トモエはとても自由な校風だったから、勝手に教室を抜け出しても、とくに怒られることはなかった。

トットは出征する兵隊さんのために、一生懸命日の丸の旗を振つた。そのたびにスルメの足をもらつては、夢中になつてそれをしゃぶつた。

ところがあるときから、いくら旗を振つてもスルメがもらえなくなつた。食料不足のCは、出征兵士を送る儀式にまで押し寄せてきたのだ。教室を抜け出して旗を振りにいってもスルメをもらえないとわかつてから、トットはとつてもがっかりして、出征式に行くのをやめてしまった。

でも、お駄賃代わりのスルメの味は、トットの記憶にずっと残ることになった。

トットのパパは、昭和十九年の秋の終わりに、北支（いまの中国の華北地方）に出征した。敗戦後はずっとシベリアの捕虜収容所に抑留されていて、昭和二十四年の暮れに、トットたちが暮らす北千束の家に戻つてきた。アメリカの話をしてくれた田口の伯父さまをはじめ、たくさんの大好きな人たちが、兵隊さんになつて戦地に向かつた。

戦争が終わると、帰つてきた兵隊さんも、帰らなかつた兵隊さんもいた。戦争中はよくわからなかつたけど、戦争が終わり、スルメをもらつて万歳をするのは、けつしてやつてはならないことだと知つた。

トットは考えた。

自由ヶ丘の駅前で、トットたちに見送られて戦地に向かつた兵隊さんたちのうち、いったい何人が無事に日本に戻つてこられたのだろうか。

トットが日の丸の小旗を振つて兵隊さんを見送つたのは、スルメの足が欲しかつたからだ。でも、兵隊さんたちは旗を振るトットのことを見て、「見送つてくれるこの子たちのために戦うんだ」と自分に言い聞かせて、戦地に赴いたのかもしれない。

もしそうなら、そしてその兵隊さんが戦死したなら、その責任の一端はトットにもあるはずだし、スルメ欲しさに「バンザイ！」と叫んだトットは、^⑤兵隊さんの気持ちを裏切つていたことにもなる。

大人になつてから気づいたことだけど、この日の丸の小旗を振つたことを^⑥ひどく後悔した。どんな理由があつても、戦いにく人たちが「バンザイ！」なんて言つて見送るべきではなかつた。スルメが欲しかつたにしても、トットは無責任だった。そして、無責任だつたことがトットが背負わなくてはならない「戦争責任」なのだと思つた。

(注) トモエ学園：トットが通う小学校。

抑留：そこに留め置かれ、労働などをさせられること。

問一 本文中の空欄A～Cに入る漢字一字をそれぞれ答えよ。

問二 傍線部①「戦地の兵隊さんのことを考えてみる！」とあるが、どういふことを「考えてみる」と言っているのか。それを説明した次の文中の空欄を二十字以内で埋めよ。

戦地の兵隊さんが、こと。

問三 傍線部②「失敗を笑い話に変えられる余裕があった」とあるが、このときの「ママたち」の生活はどのような生活だったと考えられるか。その説明として最も適当なものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 戦時中で物が不足しているが、家族には「兵隊さん」として戦地に赴く人が誰もいないため、今まで同様の物を手に入れたお金があるという生活。

イ 戦時中で食料品が手に入らない毎日を送っているが、そのことを面白おかしく語ることで空腹を忘れることができるという生活。

ウ 戦争が進み物資は不足しているが、まだ戦争に「兵隊さん」として親族の誰も赴いておらず、戦争を遠いものと思うことができるという生活。

エ 戦争が進み生活は徐々に苦しくはなっているが、物も多少あり日々の生活を明るく過ごしたいと思う気持ちは持ち続けることができるという生活。

オ 物が不足する中で、たとえ物が買えなくても自給自足をしており、なんとか日々の生活のやりくりはできるだけの食料品は持っているという生活。

問四 傍線部③「旗を振っていた人たち」とあるが、「トット」は「旗を振っていた人たち」の内面をどのように想像しているか。それがわかる表現を本文中から二十字以内で抜き出せ。

問五 傍線部④「トットはそつと教室を抜け出して、駅をめがけて走り出した」とあるが、この時の「トット」の気持ちを説明せよ。

問六 傍線部⑤「兵隊さんの気持ちを裏切っていた」とあるが、どういふことか。それを説明した次の文中の空欄Ⅰ・Ⅱを、Ⅰは二十五字以内、Ⅱは十五字以内で埋めよ。

小旗を振る「トット」を見て「兵隊さん」はⅠⅡかもしれないが、「トット」は単にⅡから小旗を振っていたということ。

問七 傍線部⑥「ひどく後悔した」とあるが、なぜ「トット」は「ひどく後悔した」のか。その理由を本文全体を踏まえて説明せよ。

問八 次の文章をよく読んで、後の問いに答えよ。

私たちは日々、本や新聞やあるいはウェブ上に掲載される種々の記事を読み、また電子メールやさまざまな文書を作成している。生涯しよまがいのにわたり、私たちが読みまた書く文字の量はいつたどれぐらいになるだろうか。たぶんそれは、数えることが不可能なほど夥おびただしいだろう。文字は、いつも私たちの身近にあり、日々の生活にとつてなくてはならないものとなっているのである。

(中略)

人間のおこなっているあらゆる実践じっせんと同じように、歴史的にみれば読み書きもまた常に①変転してやまないものであった。比較的平準化へいじゆんした仕方で読み書きがなされるようになった今日においても、それは同じである。いやむしろ、コンピュータをはじめとする電子媒体の普及や、音声出入力システムの開発によって、いまこそ②それは激しく揺さぶられているといふべきかもしれない。

ところで、読み書き能力(識字能力)のことを、英語では literacy という。これはそのまま「リテラシー」という、いわゆるカタカナ語となり、日本語としても定着しつつある。もともとは識字能力と同義であったこのリテラシーは、③近年、大幅に意味内容を拡張している。情報リテラシーなどというのは、その典型といえよう。誰もがインターネットをはじめとする情報源にアクセスし、その内容を批判的に取捨選択する能力を身につけているべきだ、というのが情報リテラシーの意味するところである。同じような使い方はほかにもいろいろある。地図リテラシー、数学的リテラシー、科学的リテラシー、セクシャル・リテラシー、メディアカル・リテラシーなどなどである。このように、リテラシーは際限なく拡張しつつある概念となっている。

これらは、なぜリテラシーと呼ばれるのだろうか。明らかなのは、リテラシーという言葉が使われた途端、そこでいわれている事柄について知らないことが、④なにか引け目のように感じられてくるということである。「そんなことも知らないの?」、というかわりに「それって、もはやリテラシーでしょう」とか、「リテラシーが低いね」などといったりする場合もある。本来そんなことは誰もが知っているはず、あるいは知っているべきだ、ということを確認するうえで、この語を使用するのが効果的だということである。

では、なぜリテラシーという語がこのような意味合いで用いられるようになったのであろうか。その鍵は、リテラシーのもともとの意味が「文字の読み書き能力」であるということと無関係ではないと思われる。文字の読み書きなら、誰でもできるはず、それと同じように、たとえばコンピュータを使いウェブにアクセスして情報を取ってくるといったことは、誰もができなくてはならない、そんなニュアンスである。

以上から明らかなように、ここでは文字の読み書きが、誰もが身につけている技能の代表選手のようなものとみなされている。これはじつに驚くべきことである。そうではないだろうか。はて? とあるいは思われるかもしれない。そんなに驚くべきことだろうか。もしそうだとすれば、真に驚くべきはむしろそのことであ

るのかもしれない。すなわち、読み書きというものがあまりにもあたりまえとなった結果、もはや誰もそれを驚くべきこととさえ思わなくなった、ということである。

たとえば、である。ある国の住民のほとんど全員が、楽譜を読みピアノを弾くことができる、などと聞けばどうだろう。たいていの人が驚くに違いない。そんなはずはないと、かえって疑いの目を差し向けるかもしれない。しかし、ある国のほとんどの住民が文字の読み書きができる、と試みてみたところで、いまさら驚く人はあまりないだろう。つまり、それほどまでに文字の読み書きは普通のこととなっている。だからこそ、識字能力を原義とする「リテラシー」の語が、誰もが習得しておくべき知識・技能一般を指す言葉として使用されるようになってきたのである。

しかし、読み書きがこれほどまでに普及したということは、本来もつと驚かれてよいことだと思われる。本書を読んでおられる方をはじめとして、普段から読み書きを実践している人は、読み書きという行為があまりにも日常的になっているために、ともすれば、話したり聞いたりするのと同じぐらいに、それが自然なものであると感じられる場合もあるかもしれない。しかし、^⑤話し言葉（言語）と書き言葉（文字の読み書き）とは、根本的に異なるものなのである。

話し言葉（言語）の獲得には、通常、学校に通ったり特別な訓練をしたりということが必要としない。学校などができるはるか前から、人間は言葉を話して生きてきた。人間にとって言語能力は生得的である^⑥とさえ考えられているのである（ノーム・チョムスキー『言語の科学』）。

文字の読み書きは、まったく異なる。それはなんら生得的な能力ではなく、長年にわたる習練の結果によつてはじめて獲得されるものである。しかもしばらく使っていないければ、あつという間に忘却されていく。実際のところ、読めるけれど書けない漢字はざらにあるのではないだろうか。よく言われることかもしれないが、「躊躇」^⑦などという文字を、たとえ読めたとしても、書くとなればそれこそ誰もが躊躇するに違いない。

その意味で、読み書きは、あえていえばむしろピアノを弾くことと似ているかもしれない。人は、長年にわたるレッスンの末にようやく楽譜を読み、一定の仕方で指を動かしピアノを弾くことができるようになる。日々の習練を怠れば、たちまちその能力は劣化^⑧していく。じつにそれは読み書きと似ている。日本で文字の書き方を習うことは「手習」と呼ばれてきた。読み書きもまた（とくに漢字の読み書きの場合には）、一定の仕方で手を動かし、繰り返し同じ記号を書き、またそれを読むということによつて成立している。使用せずにいればたちまち劣化することも同じである。しかしピアノを弾く技能が住民のごく一部にしか普及していない（たぶん）のに対して、読み書きはほとんどの住民に普及している。いまだ途上にあるとはいえ、地球上のすべての人が読み書きできるようになること、それが目指されているのである。どうだろう。^⑨やはり驚くべきことではないだろうか。

いまではそれは、あたりまえのように受けとめられているわけであるが、じつのところ、日本の歴史に即してみても、そのような状況に至って一世紀にも満たないだろうと思われる。決して盤

石^⑩でも安定的でもなく、むしろつい最近の出来事といったほうがよいくらいである。

（八鍬友広『読み書きの日本史』より）

（注）平準：不均衡をなくして均一になるようにすること。

生得：ある性質などを生まれつき持っていること。

問一 傍線部①「変転してやまない」とあるが、この語句の意味を七字以内で答えよ。

問二 傍線部②「それ」の指示内容を本文中から抜き出して答えよ。

問三 傍線部③「近年、大幅に意味内容を拡張している」とあるが、その「拡張」について具体的に述べている一文を本文中から抜き出し、はじめの七字を答えよ。

問四 傍線部④「なにか引け目のように感じられてくる」とあるが、その理由をわかりやすく説明せよ。

問五 傍線部⑤「話し言葉（言語）と書き言葉（文字の読み書き）」とは、根本的に異なるものなのである」とあるが、これらはどうのように「異なる」のか、わかりやすく説明せよ。

問六 傍線部⑥「躊躇する」の意味を次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア はなれる イ まちがう ウ おそれる

エ おどろく オ ためらう

問七 傍線部⑦「やはり驚くべきことではないだろうか」とあるが、なぜ「驚くべきこと」なのか、わかりやすく説明せよ。

問八 本文の内容の説明として**ふさわしくないもの**を次のア～カから二つ選び、記号で答えよ。

ア 本来は読み書き能力を意味する「リテラシー」という語は、より広い意味で用いられている。

イ ピアノを弾くことは、文字の読み書きと同じ程度に広く普及する可能性を持っている。

ウ 日本において、誰でも読み書きができるようになったのは、歴史的に見れば最近のことである。

エ ある文字について、書くことよりも読むことのほうが難しいことはよくあることである。

オ 文字は私たちの身近にあり、日々の生活にとって、なくてはならないものとなっている。

カ ピアノを弾くことは、読者にとって身近で分かりやすい技能の例として、用いられている。

*印の欄には記入しないこと。

受験番号

一 解答は解答用紙(全2の1)に書け。

二

問一

①

②

③

問二

①

②

③

*
二

*

*

問三

①

っ

り

②

っ

り

③

っ

り

問四

(1)

という意味。

問五

(2)

①

②

③

問一

A

B

C

③

④

⑤

三

問二

①

②

③

*
三

問三

問四

い。

問五

気持ち。

問六

I

気持ち。

問七

II

問二

い。

問三

い。

問四

い。

四

問一

い。

*
四

問二

い。

問三

い。

問四

い。

問五

い。

ものである。

問六

い。

問七

い。

から。

問八

い。